

最優秀賞
文部科学大臣賞

小さな行動がつなぐ、世界の子どもの笑顔

〔福島県〕

福島県立福島南高等学校 1年 高橋 優衣

私は、大学生の姉からベトナムの山岳地帯ランピンで撮られた写真を見せてもらいました。そこには、十分な机や教室が整っていない環境で、それでも懸命に学ぶ子どもたちの姿がありました。民族や言語が入り混じるこの地域では授業の合間に子どもたちが鬼ごっこをしたり、民族舞踊を楽しんだりしていました。はじけるような笑顔は、困難な環境でも助け合いながら生き抜く力を映し出しているように感じられ、私は強く心を動かされました。

姉は、ベトナムの教育支援団体の活動に参加しています。私は姉の話を通して、教育環境に恵まれない子どもたちの現状を知りました。文字が読めない子がいること、学校まで遠く通うのが大変な子がいること、日本にいたるだけでは想像できない現実が、そこにはあります。それでも子どもたちは夢を持って学び続けています。「将来の夢は大人になることです」という子どももいます。病気や地雷で命を落とすこともある中で、生き抜くこと自体が夢になるという事実には、私は衝撃を受けました。

姉の活動や現地の子どもの話を聞き、私も自分にできることはなにかと考えるようになりました。そこで学校の友人と相談し、不要になったクリアファイルを集める活動を始めました。福島市のSDGs推進企業で、回収した不要なクリアファイルを換金してくれる仕組みがあると知り、その制度を利用して寄付することにしました。私はポスターを掲示したり、クラスメイトに呼びかけたりして、学校に回収箱を設置しました。さらに駅前の商店街でも協力をお願いしたところ、予想以上に多くのファイルが集まりました。活動をSNSで発信すると福島県外からも「協力したい」という声が届きました。友人や先生方、地域の方々など、多くの人々に支えられながら取り組みが広がっていったことに、大きな喜びを感じました。この活動を通して、ベトナムの子どもの現状を周囲に知ってもらえたことは、私にとって大きな喜びでした。身近な行動が、国際的な支援

につながることを実感し、SDGsの理念を頭で理解するだけでなく体験として理解できたのです。

寄付金は現地の学校のトイレ建設費の一部として使われました。以前は、女子生徒がトイレを我慢して体調を崩し、通学が難しくなることもあったそうです。完成したトイレの写真には、安心して学べる環境を得た子どもたちの笑顔がありました。自分たちの小さな行動が、遠く離れた子どもたちの生活を少しでも改善できたことを知り、私は「誰かの力になれるのだ」と実感しました。

現在、現地の女子生徒たちは裁縫を学び、ベトナムの伝統布を使った小物を販売する計画を立てています。カラフルで模様も美しい布で、作られた製品には、他にはない魅力があります。私はぬいぐるみのデザインを考えることに、一緒に関わらせてもらっています。中には、こぶたのぬいぐるみもあり、とてもかわいいです。かわいそうだからではなく、「素敵だから買いたい」と思えるような商品づくりを目指しています。ある女の子は「日本語も勉強したい」と目を輝かせながら語ってくれました。彼女の両親は、ベトナムの首都ハノイへ出稼ぎに行っていて、障害のある祖母を介護しながら二人暮らしているそうです。それでも未来への希望を失わずに頑張っています。その姿に胸を打たれました。姉は仲間とともにSNSでの広報や販売の効果的な方法を考案しています。今後は私はこの活動に関わり続けたいと考えています。

これらの体験を通して、私は小さな行動が世界の子どもの未来につながることを学びました。そして、学ぶことは自分や誰かの未来を支える大きな力になるのだと改めて実感しました。これからも、自分にできることを見つけ、学びを重ねながら、世界の子どもの笑顔を広げる一歩を歩み続けていきます。